

人文会ニュース

1994. 4

大クエンとハルトリー

..... 東京大学附属図書館 石川一樹

1

鞆の中身

..... 丸善岡山シンフォニービル店店長 横井邦光

6

〔人文書講座30〕

家族のからだ・家族の精神

..... 評論家 芹沢俊介

11

『脳を探検する』ブックフェア

..... 草思社 小林登美夫

24

一九九三年人文会各社の受賞図書一覧

20

『人文書のすすめ』利用の仕方

..... 誠信書房 濱池正憲

28

ハワーズ・エンド

E・M・フォースター 著 作集 3

楡の木が揺れるハワーズ・エンド邸を舞台に「英国の運命」を描破し、結合の可能性を探った代表作。小池滋訳 三三〇円

固有名

レヴィナス ブーバー、ツェラン、デリダ… 著者につなぐる13の固有名たちを論じた初の作家論。合田正人訳 三三八円

自己の分析

コフート ナルシズムは病いか。自己愛パーソナリティ障害の治癒への道を切り拓く代表作。水野・笠原監訳 六六〇円

ルーヴル美術館

ヨーロッパ 絵画 美術館シリーズ 昨春秋の二百年祭にあわせて発行された最新カタログ。四五〇点余の名画を精選。田辺徹訳 五五〇円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

写真の現在

飯沢耕太郎著 三九一四円
クニタケ 1981-1983
現代の「生きた」写真事典。

柏木 博著 三六〇五円

ユートピアの夢

(20世紀の未来像) 近代から
ポスト・近代思想を見通す。

鶴岡正樹著 4944円

大衆演劇への旅

(南條まさきの一年・五月)
社会学者の劇団体験日記。

未來社 東京都文京区小石川3-7-2
(03)3814-5521 (価格は税込)

ミネルヴァ書房

たのしく
読める

イギリス文学

中村邦生／木下卓／大神田文三編著・作品方
イド150 名作・話題作の魅力をも十分に味わえ
るユニークなガイドブック! 二八〇〇円

たのしく
読める

アメリカ文学

高田賢一／野田研一／笹田直人編著・作品方
イド150 あらすじ、作品の読み方、作家の履
歴、読書案内——立体的に構成。二八〇〇円

釈迦の予言

○月蔵経の世界

●一九八〇円

菊村紀彦著・増補改訂版

●一九八〇円

暦(こよみ)入門

○暦のすべて

●一九八〇円

古代大和へ、考古学の旅人

石野博信著・考古学研究秘話

●二五〇〇円

歌舞伎入門

○四百枚の写真でみる歌舞伎の全と

●五八〇〇円

歌謡伎入門

和角仁・樋口和宏著・4月20日刊

●二五〇〇円

試みとしての環境民俗学

鳥越皓之編・自然との共生

●二五〇〇円

雄山閣

* 価格は税込

千代田区
富士見2

振・東3-1685(5月から00130-5-1685に変更)

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話075(581)5191 振替京都2-8076

大クエンとハルトリー

東京大学附属図書館

石川 いしかわ
一 かずき
樹

東京大学医学図書館の医学史料室には「大クエン解剖書」と呼ばれる書物が架蔵されている。古く明治十一年（一八七八）二月の「東京大学医学部文庫書目」（『東京大学医学部百年史』所収）に「大クエン 解剖書」二冊一部と記されており、正確には、Quain, Jones and Wilson, Erasmus (ed.) A series of anatomical plates, in lithography, with references and physiological comments, illustrating the structure of the different parts of the human body. London: Taylor and Walton, 1842. という長い書名を持つ解剖書のこ

とをいう。編者の一人、ジョーンズ・クエーン（一七九六一八六五）は英国の解剖学者。やはり解剖学者であった弟リチャードと区別するためか、あるいは大型の図書（高さ五二センチ）ということで「大クエン」と名付けられたのであろう。

筆者がこの「大クエン」の存在を教えられたのは、医学図書館在職時に大菱お世話になった田邊文子さんからであった。田邊さんは、『大クエン』の「遍歴」という文章の中で、明治初年に東京大学医学部の前身によって購入された「大クエン」が、大学組織の変遷を見、関東大

震災や太平洋戦争といった災禍を免れて今日の医学史料室に落ち着くまでを、日本近代医学史や東京大学史を踏まえながら丁寧の後付けられている。(東京大学附属図書館月報『図書館の窓』三〇―四) 実際、標題紙などに捺された「大学東校典籍局之印」「東京大学図書之印」「帝国大学図書之印」「東京帝国大学図書印」等の蔵書印が、一二十年にもわたる『大クエン』の遍歴を如実に物語っている。

ところで、この「大クエン」の標題紙には蔵書印の他にもうひとつ、「横浜弁天通 九十三番 ハルトリー」という焼印が捺してある。本書の存在を知って以来、横浜が筆者の地元ということもあり、この焼印のことは気になっていた。その後若干わかったこともあるので、これを手掛りに、英国ロンドンからはるばる海を渡り日本へやってきた「大クエン」が東京大学の前身に入るまでのことや文明開化期における書籍の流通事情の一端にふれてみたいと思う。

まず、「横浜弁天通」であるが、現在でも横浜港や今話題のランドマークタワー・ベイブリッジなどから程遠くない所に、横浜市中区の町名としてその名を残してい

る。安政六年(一八五九)の横浜開港に際して設置された通名で、当時あった弁天社へ通ずる道から名付けられたらしい。開港以来、舶来品を売る店や大貿易商などが軒を連ね、賑わいをみせていた。「九十三番」については、現在のどの場所にあたるのか、いまのところ不明である。

次に「ハルトリー」だが、これは調べていくとなかなか面白い存在である。明治期の様々な事象の始まりについて記したものに、石井研堂の『明治事物起源』(『明治文化全集』別巻)という書があるが、その「洋書店」の項に、慶応三年(一八六七)発行『万国新聞紙』の発行書肆として「横浜本町通八十三番 ハルトリー」の名がみえる。『万国新聞(紙)』は英国領事館牧師ベリー(Bailey, Buckworth M.) が慶応三年正月から明治一年五月まで横浜で発行した邦字新聞で、ハルトリーは毎号のように広告を掲載している。

此度、英吉利、亜墨利加ヨリ新二船来仕候。スペルリ
ング、文法書、歴史地理書、地球儀、地図画具、「コムハ、
絵の具、医書、新兵書 当時英にて用ゆる者、和蘭、仏蘭西の対字

書、リーディングブック、文法書、其外西洋筆墨紙地本、「スレート石」字を書きし後板、ひてまた研石、写真道具等、私店にて下直ニ致し差上候間、何卒御好の御方様は多少に不拘御求被下度奉願候、以上。

横浜本町通五十一番

大坂かいや町

ハルトリー

右に掲げたのは、第一四号（慶応四＝明治元年「二八六八」十月）以降に載せられた広告だが、これからわかるように、ハルトリー（Hartley）は明治維新前後の横浜で洋書を主とする西洋の舶来品を輸入販売する商人（商會）の名だったのである。

同じ年の閏四月、新政府側によって横浜に戊辰戦争の傷病兵を収容するための病院が設けられた。七月、横浜の病院は東京・下谷に移され、翌明治二年（一八六九）二月に医学校兼病院、一二月には大学東校と改称されるのであるが、この間の医療を指導していたのは、英国公使館副領事ウィリス（Willis, William）や同付医員シドル（Siddall, J. B.）らであった。田邊さんも述べておられる

ように、明治二年中には新政府によってドイツ医学導入の決定がなされているので、「大クエン」が横浜のハルトリーから東京大学医学部の前身によって購入されたのは、明治元年か二年の頃のことであろう。傷病兵の治療といえはおおよそ外科的治療となり、人体解剖学的知識の必要性から英国の解剖書が購入されたものと思われる。

なお、ハルトリーから購入されたのは「大クエン」だけではない。筆者は、現在勤務している総合図書館でも標題紙に同様の焼印を捺したウェブスターの英語辞書（Webster, Noah. American dictionary of the English language : exhibiting the origin, orthography, pronunciation, and definitions of words. Philadelphia : Lippincott, 1870.）を見出しているし、今後も探せばさらに発見される可能性もある。ちなみに、ウェブスターの辞書は福沢諭吉が万延元年（一八六〇）、咸臨丸で渡米の際持ち帰ったとして著名なもので、前掲「東京大学医学部文庫書目」にも「ウェブストル 大辞書」一三部と記されている。再び話をハルトリーの方へ戻そう。前に紹介した広告をみてわかるように、ハルトリーでは書籍以外にも

様々なものを取り扱っており、他にも医薬品や機具、はてはラムネ製造機・清涼剤・キャップ等々の広告を『万国新聞紙』『横浜毎日新聞』などに出していた。また、大坂・かいや町（榎屋町、現大坂市西区内）では医師をする傍ら舶来品を商い、ゴム風船で大儲けをし、近所の子供からは「ハルサン、ハルサン」と呼ばれて人気があったという話も残されている。『内外新報』第十七号 慶応四年閏四月二〇日

それでは書籍の販売の方はどうかというと、まずは丸善との関係があげられる。『明治事物起源』『直輸入の洋書店』の項でも取り上げられているように、丸善は日本での書籍直輸入店の嚆矢として著名だが、創業者で医師の早矢仕^{はやしゆうてき}有^あ的^{てき}が福沢諭吉の教えを受けて横浜に「丸屋」を開いたのは明治元年のこと。まだ外国商品はすべて横浜の外国商店を経て輸入しなければならず、丸屋はハルトリーからは書籍と薬品を仕入れていた。この頃のこととして、「当時は外人商館との取引には、いろいろ困難があったらしく、ハルトリー商館へ荷物を引き取りに行った際に、ハルトリーに不法のことがあったために、丸屋の店員であった松本善介が、手きびしく反撃し、以来ハ

ルトリーはあまり無法のことを言わなくなった」というエピソードが伝えられている。『丸善百年史』上巻）医学校取調御用掛であった相良知安がドイツ医学採用に関する意見（『医制五拾年史』内務省衛生局 所収）の中で「英は国人を侮り」と記したように、当時の（一部の）英国人が日本人を蔑視していたのは確かであり、このエピソードもそのような感情から出た事件といえようか。

驕れる人も久しからず、ではないが、このハルトリー、『横浜毎日新聞』第八八六号（明治六年「一八七三」十一月二日）から次のような広告を出し始めた。

一各国書籍類品々二万冊

右者、弊店は迄各国書籍売買致来候処、勝手に付今般業体替仕候に付、是迄所持の書籍類極廉価に売払候間、御求被成度御方は当館へ御来車被下候。

〔海岸仲通〕二拾四番 ハルトリー

これは「店じまい大処分バーゲンセール」の広告といったところだが、書籍販売の難しさは今も昔も変わらなかったらしい。他にも、この頃、和古書を取り扱って

繁盛していた東京・芝太神宮前の岡田屋嘉吉という者が、福沢諭吉のすすめで洋書取扱店に衣替えしたところ、十年もたたずに店をたたきざるをえなかったというような話も残っている。『明治事物起源』新旧書店の交代期）ハルトリーも洋書の輸入などでは儲けが小さいと考えたのであろう。

それより四年後の明治一〇年（一八七七）一二月、英国商人のハルトリー（ハルトレー）という者が阿片の密輸入により領事裁判に付されている。時は安政の不平等条約により外国人は治外法権の時代、横浜の英国領事裁判所は翌年二月に無罪を判決したが、日本の世論から非難が沸騰したため、四月に逆転有罪となった。『横浜毎日新聞』ほか）このハルトリーが商売替えしたあのハルトリーかどうかはいまのところ断定できない。しかし、あのハルトリーは奇妙なことに転々と住所を替えていたし（本町通↓弁天通↓海岸仲通、番地も一定しない。ちなみに有罪になったハルトリーの住所は居留地九十番館）、医薬品（当時阿片は医薬品としての使用が認められていた）も取り扱っていた。商売替えがうまくいかず、金に困って違法行為に手を染めたとしても不思議ではないだ

ろう。なにやら、歴史は繰り返すではないが、最近、斯界で世間を騒がせた事件を彷彿とさせなくもない。その後、ハルトリーは商人としての信用も無くし、神経衰弱で帰国したという。書籍商ハルトリーの最後としたらいささか哀れな末路といえよう。

文明開化期における書籍の流通事情は、以上述べてきたように、書店にとっては容易なものではなかったようである。容易でないという点では、不況の長引く平成の今も、学術書のような堅い本を出版していくのはなかなか大変なことだと思う。しかしながら、大学図書館に勤務し、利用する者としては、それにも負けずに良質な学術研究書が提供され続けられることを願うものである。

鞆の前身

「人文会」との最初の出会いは、今から遡ること九年前になります。当時私は名古屋支店、書籍販売課に配属されており、主に教育市場を担当していました。外売の最大の商戦は教科書販売といっても過言ではないほど、教育市場での市場競争は熾烈を極めます。

しかし教科書の時期が終了するといっきにゴールデンウィークが待ち受け、一仕事を終えた安堵感も手伝って、新年度が始まったものの一向に志気が高まりません。そんな社内の空気を一新するために、販売課長の柔軟な思考のもと、和書の「人文・社会セット展」が新機

丸善岡山シンフォニービル店店長

横井^{よこい}邦光^{くにみつ}

軸（尻をたたく格好の材料）としてスタートしました。翌年、第二回のセット展のテーマが「人文会への創造的挑戦」というもので、これが私と「人文会」との最初の出会いです。この時のプロジェクトチームの仕事は会員版元の商品を中心に、テーマ別に分類、編集作業を加えて一冊のカタログを作ることでした。販売目標については、担当者ごとに自己申告がなされ、時限設定のもとに集中的に販促を推進することになりました。私の基本戦略は、まず図書館の書庫に入って全点の欠本調査を実施し、大学ごとに未購入基本図書資料を作ることです。

た。折しも新年度予算実行期にあたり、欠本を全点購入しようとする大学もあらわれ、美味しい商売をさせて頂きました。また、日頃訪問していない研究室にも顔を出すことによりさらに販路が広がるなど、セット展の成果が上がったことがつい昨日のことのように思い出され、感慨を新たにしています。

さて「会」より、人文会二十五周年記念誌「人文書のすすめ」の利用状況をからめて執筆するようにとのご要望なので、店舗Ⅱ書店での五年間の変遷をたどりながら本題に触れたいと思います。

私が店舗という経験のない部門に配属され、いきなり店長という重責を担ってから五年が経過しました。その間毎日多勢のお客様がおみえになりました。たくさんある書店の中から私の店を選んでいただき、お買上げいただくことは、本当に有り難いことです。この感謝の心を大切に、店舗・社員・商品の表情づくりに心配りをしてきたつもりですが、ともすれば日々の忙しさに紛れ、明確な指導力を発揮できないまま試行錯誤をくり返していたように思われます。こうした混沌とした状況の中で、店舗にとって常に目指すべき重要なテーマを見直すチャ

ンスがあります。それは読者からの不満や期待感を率直にお聞きするときであり、出版社、取次店、さらに同業書店との心のつながりが持てたときであろうと思います。

現在、書店を取り巻く環境は厳しく、当店も利益確保に汲々とした状況ですが、各界からご指導いただいたことを基に、今、店舗が直面している市場環境の分析や、店舗が持っている経営資源の分析を行い、長期的な視野に立って強力に引っ張っていく戦略の立案が必要です。

当店は岡山市表町商店街北部にあたり、昭和五十五年から進められてきた表町再開発事業の核である岡山シンフォニーホールが竣工された平成三年九月、その地下一階に出店しました。売場坪数六七〇坪（和書四五〇坪、洋書五〇坪、文具一四五坪、ギャラリー二〇坪）、開店して二年半になりますが、一年を経過した時点で、お客様が定着したことを節目に店内のリニューアルを致しました。改装のポイントは、お客様から評価される地域一番店の再構築と、知的環境創造店舗へ向け、ハード、ソフト両面の研鑽にありました。そこでまず問題点を明確に把握し、改善策を検討することが、推進の第一歩となりました。

た。

ポイントの第一は競合店と比較して自店売場の問題点を集約すること、加えて大型店として商圏の市場規模を勘案した中で、中・長期の視点に立ってジャンルごとの適切な商品構成を分析し、対策を立てることの必要性を感じました。

開店以降一年間の売上の推移は、一般書、特に雑誌、実用、文庫といった買廻り性をもつ分野が、書店の認知度が高まるにつれて、予想を大きく上廻って伸長しました。一方、売場坪数を充実することによって、かなり伸長が期待できると判断されるジャンルも、客観的に把握することができました。いずれにしても当店の弱点は競合店と比較して、担当者の商品知識や習熟度を前提とした中で、四五〇坪の売場を活かしきれない商品量の不足が改善のポイントであることが明確になりました。お店の形態は一フロアー、多層階店舗に大別され、壁面棚の利用スペースによって多少商品量は変わりますが、一般的には一坪の売場に対する棚段数は一〇段の割合の商品量が目安となるようです。

ポイントの第二は、買いやすい売場づくりをするため

に、顧客需要にマッチした客導線が必要となり、隣接ジャンルの関連が重要になってきます。年齢別、性別、階層別も付加して商品構成を見直し、強化していかなければなりません。平台、面陳棚の増設により、売れている商品の多面展開も可能となり、さらに商品のメリハリも強化されます。隣接領域との間の共有部分には多岐の分野商品の効果的展開が可能となり、季節感、社会動向を敏感にとらえた商品鮮度のある企画も組めるようになりました。

ポイントの第三は、お店が広すぎて商品が探しにくいというお客様の不満にお応えすることです。一フロアーのお店は機能的には回遊性が生まれ、お客様にとって買いやすいお店といえますが、反面分類表示が甘くなると、度々お越し願わないと探しにくいお店となります。デザインにとらわれることなく、従業員に尋ねなくても目的の商品が探せる分類表示が必要です。

以上がリニューアルを実施した時点での、主にハード面の検証であります。こうしたことをベースに、お店を訪れるお客様の声を聞くことにより、今お客様が何を望まれているかを察して、商品鮮度に活かすというソフト

面での強化が固定客ファンをつくる店づくりの基本です。そうすることにより、お客様からの期待感や信頼感が醸成され、地域社会への貢献にもつながると思われま

す。

さて、リニューアルにおける「人文書」の品揃えの強化策については、基本的な概念として①現状の棚段数の50%アップを目安として棚数が倍増する歴史、哲学、心理は「人文科学の現在」の基本図書一覧を参考に、現在常備している書籍を調査し欠本の商品を充当、②分類、配列についても、基本図書一覧を参考に棚構成の整備として活用、③芸術、文芸、社会科学を隣接ジャンルとして客導線をつくる。以上の三点をふまえた後、新刊書も含め売筋の定番書目について筑摩書房の菊池氏にご相談申し上げたところ、早速、人文会会員版元にご連絡をいただき、各出版社のデータをもとに品揃えの強化を図ることができました。その後の売上実績は人文全体で40%近い伸びを示しています。売場面積における坪構成は10%にあたり、お店全体の坪効率の水準に今一步の状況です。しかし専門書の充実を図り大型店舗としての商品構成上の核ができたことは、岡山において地域一番店を目

指す当店にとって、今回のリニューアルの大きな成果であったと推察されます。

昨年十月七日に「人文会」との研修会の機会にめぐまれました。訪問いただく事前調査として、人文会会員二十三社の売行良行書ベスト30、と同業店の売上実績表一覧を参考資料としてご依頼申し上げました。この資料をもとに、大型店の売上実績を参考に三十点ほどの面陳商品を選定し商品の充実を図りました。又筑摩書房の山野氏のご紹介で、京都のアバンティ、駿々堂、ジュンク堂書店のベテラン人文担当者との研修の場を事前に持つことができました。貴重な経験のもとに、担当者の潜在力を発揮してくれるものと期待しています。

さて、今回の研修会の直前に、人文会二十五周年記念出版「人文書のすすめ」を手にして、早速当店の在庫チェックをいたしました。歴史、心理は70%位の常備となりましたが、人文全体では50%弱の在庫となります。四十五坪の面積で適量かどうか判断しにくい部分もありますが……店頭にない商品については、著者、出版社、価格を基準に順次手配し、必備図書として一度は在庫するように心掛けています。第一部のテーマ別参考文献

は、新鮮、かつ必要な情報を絞って「情報のブレンダー」として有効に活用していきたい。日常的な営業活動に加えて、お客様に新鮮な驚きや夢を与えるイベントを盛り込んでいくことが固定読者の獲得につながっていくと思います。

当店もオープン当初は、欲しい本がない、探している本がみつからない、商品がどこに置いてあるか分かりにくいと、度々ご指摘を受けました。この間の従業員の懸命な努力によって、日をおってご来店客数も増え、一定の評価をいただけるお店となりました。これからのお店は、お客様が何を望み、そして私達に何を求められているかをよく認識し、日常の仕事の中で、共に感じ行動してゆく姿勢が必要です。お客様の価値感の変化をたえず生活者の視点で把握していくお店がやはり信頼され店舗の地位と成長を確かなものにしていきます。ただ単に偏った考え方や、旧来の手法だけでは新たな発展の機会も生まれてきません。今まで何となく続けてきた仕事を、もう一度見直し、要らないものを捨て去ったところから新たな創造の芽が生まれてきます。

私は入社以来二十年近く外売をしてきましたが、後輩

社員の教育にあたって「鞆の中身」は大丈夫かと、よく問いかけをしてきました。このことは訪問するお客様への情報が的確に整理、整頓され、誰に対しても誠心誠意を尽しているかということになります。ご用聞きでは決していいビジネスは生れません。

お店でも同様のこと言えると思います。従業員全員が積極的に新しい価値を創造していく。誠心誠意を尽くしてお客様をお迎えする。そこにはお客様と心が通い合った、感動を呼び起こす、店舗の姿があると思います。

以上

家族のからだ・家族の精神

芹沢 俊介

（評論家）

1 流行語を手がかりに

高度大衆化社会は同時に高度消費社会である。それはまたサービス中心の社会でもある。以下ではまず、「家族のからだ」という観点から、日本の家族がこのサービスの中心型の社会を、どのように呼吸しているのだろうかという問題を考えてみよう。このような問題を考えていく過程に、現在における家族のありのままの姿が薄ぼんやりとでも浮かび上がらせることが、この項の狙いであ

る。

サービス中心型社会の特徴は、サービスを受ける側が主体で、サービスをする側が客体であるという点にある。このことは一見、当たり前のように思えるけれど、よく考えると奇妙な事態ではないだろうか。奇妙と言って語弊があるなら、新しいと言い換えてもいいだろう。人も産業も物を生産するのではなくて、サービスを生産するのである。たとえ物を生産していても、その物に付加されているサービスに焦点が合わせられるのである。当然、サービスを受ける側は、そのサービスを購入・消

費するのである。

サービスとは、別の言葉に置き換えてみると「もてなし」である。人、物、情報などすべてが安価、便利、快適といったもてなしの幾つもの評価軸によって測られる。このようにしてそのもてなしの良し悪しを判断するのは、代価を支払ってサービスを購入する消費者（のからだ）である。したがってサービスの質と量のあり方を変えたり、決定するのは最終的には消費者（のからだ）なのである。これが、サービスを受ける側が主体であるということのとりあえずの意味である。こうしたもてなし、つまりサービス重視の考え方の出現は、均質的な物の大量生産の時代を終わらせる力となった。

ところでこの論の趣旨からしてこのような消費の主体を家族、正確には「家族のからだ」というふうに限定することは許されるであろう。その上で以下のように設問することができると思う。私たちの家族のからだは戦後、何を欲望し、どのように自分のからだを形成しようとしてきたのだろうか。何を欲し、何を削除してきたのであろうか。社会のなかでの代謝あるいは呼吸の仕方をどう変えてきたのだろうか。

家族のからだは戦後ある時期まで一貫して、利便性（便利であること）を追求した。それはたとえば、一九五三年の流行語が「電化元年」であり、家電製品の電気冷蔵庫・洗濯機・掃除機が「三種の神器」と名づけられ、これらを持つことが家族における生活革命を起こすものとして主婦の憧れの対象になったのは、翌一九五四年であったことから、容易に推測できる。またステンレス製のキッチンセットが入った台所が文化生活のシンボルとされたのは、一九五五年である。換言すれば、文化生活をもたらず家事労働の改善を戦後の家族のからだが切実に要求しはじめていたことを、こうした現象は物語っていた。

戦争下においてのスローガン（流行語）は「耐乏生活」（一九四〇年）であり、「欲しがりません勝つまでは」（一九四三年）であったことから分かるとおり、家族のからだは敗戦前にはほとんど、欲望を徹底的に押さえ付けることを自己に課してきたのである。それゆえに家族のからだは敗戦によって、一時的に激しい「虚脱状態」に陥ったのである（一九四五年）。文化生活への要求は、そうした状態から態勢を立て直し、ようやく家族のからだ

戦後性を要求しはじめたことを告げていたのである。

だが、それからほぼ一〇年のあいだで利便性の追求は、家族のからだにとつてのメインテーマの位置を追われることになる。代わって新しく登場してきたのが、「快適さ」というテーマであった。一九六六年、「三種の神器」は次の三つの物に取って代わられたのである。すなわちカー・クーラー・カラーテレビである。これらは英語の頭文字を取って3Cとも呼ばれたのである。電化製品や台所製品を求めるといことは、家事労働の苛酷さから解放されたいという家族のからだの欲求であり、3Cの登場はそうした欲求がほぼ充たされたということである。

あるだろう。利便性から快適さへのテーマの移行はさまざまに言いうるけれども、家族のからだの問題としては、その関心が労働から離れたことを意味していたのである。

家族のからだが利便性を離脱しようとしている姿を以下の生活美学的な流行語のうえに認めることができるかと思う。

「かつこいい」(一九六七年)

「エコノミックアニマル」(一九六九年)

「モーレッツからビューティフルへ」(一九七〇年)

「ナウい」(一九七二年)

「ユックリズム」(一九七三年)

鉛筆と人間

ヘンリー・ペトロスキー 渡辺潤 岡田朋之訳 技術者たちの発明と工夫。偉人たちのエピソード。小さな道具の壮大な文化史。 3800円

時計と人間

アメリカの時間の歴史／マイケル・オマリー 高島平吾訳 19世紀「標準時」の誕生から今日までの、時間をめぐる歴史のドラマをたどる。 3800円

歓迎されない人々

フランスのアラブ人／タハール・ベン・ジェルーン 高橋・相磯訳 移民・人種偏見問題で精神的危機に陥った現代フランスの実態を告発。ゴンクール賞作家の報告。 2600円

日米生活対話

パソコン通信による16テーマ 室謙二 N・バーデキー 風呂から葬式まで、日米が率直に語り合う。電子メールを駆使した新しい試み。 2900円

晶文社



東京都千代田区外神田2-1-12
電話3255-4501

「ひと味ちがいます」（一九七五年）

「ダサイ」（一九七九年）

「軽薄短小」（一九八三年）

これらの生活美学は二つの正負の対立的な価値観に振り分けられる。プラス価値の側には「かっこいい」「ビューティフル」「ナウい」がリストアップされ、マイナス価値の側には「エコノミックアニマル」「モーレツ」「ダサイ」が記載されるのだ。社会が自分の姿を鏡に写し出して、外観を気にすることができくらゐの余裕をもちはじめたということであろう。同時に家族のからだは脱労働、脱利便性の欲求を正面に掲げて、歩んできた姿を眺めることができる。

このような標語に家族のからだの欲望の構造転換を認めてきたのだが、このような変遷にはもうひとつ注目すべき変化が隠されているのである。それはマイナス価値としてリストアップされたものの削除というかたちをとって現れたのである。

一九八三年の流行語である「軽薄短小」は、言うまでもなく「重厚長大」の対極である。日本の社会構成が工業（第二次産業）中心から、サービス業（第三次産業）

中心へと移ったこと、産業の対象が個人化したことの証左である。言い換えるなら、家族のからだもまたこの間、激しく個人化を志向したのである。

こうした欲望の転換は、それまで物を獲得する（足し算）という形で家族のからだは自分の欲望を充足させようとしてきたのに対し、新たに反対の削除（引き算）という方向へと自分の欲望を発動させることによって生じた。実は家族のからだの切実な要求は物を獲得することだけにだけ向けられるだけでは十分ではなく、さらに自分のからだをどのように構成して行くかを課題にのせたのである。それを知るには時間を少しだけ後ろへ巻き戻して見なくてはならない。

一九六〇年に大流行した言葉に「家付き、カー付き、ババ抜き」がある。この流行語はブラックキューモアにくるまれてはいたけれど、若い女性たちが希望する結婚の条件が率直に現れている。余計なことを付け加えずにここでの話に沿って述べるなら、ここでは削除（引き算）が行われようとしている。家族に自分のからだの規模を縮小したいという動きが現れたのだが、それがこのような流行語によって的確に捉えられているのが目撃できる

のである。結婚が女性の選択の対象となったこと、このことは明らかに欲望の個人化の表現であった。当時はまた「三ちゃん農業」という現象も露出した（一九六三年）。父ちゃんは都会へ出稼ぎ、残った母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんの三人で農業をするような状態のことである。こういう事態は、家族のからだが農村的な部分と都市的な部分に分裂し、しだいに農村的な部分を削除せざるをえなくなってきたことを物語っている。農業はこの段階ですでに、若い家族のからだには「かっこわるい」「ナウくない」「ダサイ」と映っていたのである。

そして一人の女性が生涯に何人の子供を産むかを示す指標である出生率が二・一を割ったのが一九七四年あたりの境にしてである。二・一という数字は、その社会の人口が拡大も縮小もせずに再生産されることを語っている。定年後に家にばかりいて、やることのなくなった役に立たない夫を呼称して「粗大ゴミ」とか「ぬれ落ち葉」という言葉がはやるまでには、さらに十年余を必要とするのだが（一九八八年）、このような一連の事態は家族のからだが加算し、それをハイレベルなものに更新するという直進的な欲望だけでなく、それとは別に明瞭な自己

イメージを抱きつつ、その自己イメージにそぐわない現実を削除するという方向をもったことの現れであったのである。

女性の3高志向ということが言われたのは、一九八七年であった。3高とは高身長・高学歴・高収入である。結婚相手の身長・学歴・収入は高ければ高いほどいいというわけである。「パパ抜き」をほぼ実現し、家族のからだの選択的な要求がさらに高度化して、ついに相手の身体性を条件に掲げるまでにいたったのである。身長が高いかどうかは偶然性に起因している。その偶然性を要求するまでになっているからである。

ここで求められているのはもはや利便性でも快適性でもない。高収入は高度に物的な利便性、快適性を保証すると言われれば、そのとおりかもしれない。しかし、そのように考えるよりもむしろ、無意識の削除をともなった一種の奢侈ともいえるべき満足を与えてくれる力と考えるべきではないだろうか。高学歴も同じである。人から夫の学歴を尋ねられたときに、胸を張って答えられることの満足、さらには大学名を口にしたときの快感、聞いた人の羨望と嫉妬の入り混じった眼差し、これらがまた

らす満足が重要な動機なのである。

高身長もまた同様だ。だが高学歴、高収入とは意味合いを少しだけ異にすることも確かである。若い女性たちはなぜ、ある人たちにとっては手に入れようとして努力しても不可能な身体的な偶然性を、たとえ相対的な欲望としてであれ、条件化したのだろうか。なるほど、他の二つが満たされても、身長が不足していたら画竜点睛を欠くといったきらいがないわけではない。夫になる人の背が高いということは、アクセサリーとしての必需的なアイテムなのである。アクセサリーとしての必需性ということは、奢侈という満足のテーマが家族のからだの欲望となりつつあることを示しているのだ。

私たちの認識では、日本人の社会意識が消費資本主義と呼ぶのがふさわしい段階へ入ったことに気がついたのは、一九七三年のオイルショックを境にしてであった。国内における生産中心の高度成長経済はその役割を終え、新たな展望のもとに生活を組立て直さねばならない段階に移行したのである。移行の一つの目安となるのは、選択的消費支出が必需的消費支出を上回り、全体の五〇%を超えたという事実である。

一九七〇年	五一・〇%
一九七五年	五五・三%
一九八〇年	五九・七%
一九八五年	六二・七%
一九九〇年	六四・六%

数字から知れるように、一九七〇年においてすでに選択的消費支出は全体の半分を超えていたことが知れる。それでも当初は他人の行動を見ながら注意深く自分を横並び的に決定するといった自己防御型 $\parallel$ 集団主義的な消費行動が支配的であった。それが八〇年代に入ると、しだいに逆の、他人とは違う自分を主張したがる差異型 $\parallel$ 個人主義的な消費行動へと転換して行った。そして差異型 $\parallel$ 個人主義的動機にもとづく消費行動こそが、選択的消費支出が五〇%を超えたことに示される社会の消費資本主義化の本格的な証拠なのである。欠乏は終わった。だれもが中流意識のなかで暮らしている。身長は相対的である。だがその相対性が他者との差異として意識されている。差異意識は相手の身体へと投影されるのだ。それはだから奢侈の一形態というほどのものである。だがこう言ってみても、どうもびたりと決まらない。

もっと無意識的な動機が感じられてならないのだ。

家族のからだが個別的になっていること、家族のからだとその個別的になった欲望を具体的なイメージとして、自己の未来のからだ、すなわち生まれてくるであろう子供の身体的将来像への期待——要するに我が子は背が高くならないという期待感。それは反転すれば背の低い子は困るという削除意識に変わる——が、結婚相手への条件として投影されているのだというふうに考えることはできないだろうか。家族のからだが具体的な構成員の身体に関心をもちはじめたのである。そのように考えるなら、家族のからだの病理のようにしてとらえられてきた過食症や拒食症といった奇妙な現象と同根のもの

として、こうした欲望を位置付けることができる。そういう混沌する像を裏にもった一見いい気な欲望として浮かび上がってくる。

八〇年代の終わりから九〇年初頭にかけて、バブルの真っ盛りの頃、3Kという言葉が脚光を浴びた。「きつい・汚い・危険」の三つを意味する略語である。若い人たちから回避されがちな労働ないし職場を象徴する用語であり、これもまたいやらしいくらいに見事な表現である。「きつい・汚い・危険」とストレートに言ってしまったては差し障りがある。そこを3Kというように抽象する。すると少し小ばかにしたようなニュアンスも醸し出されてくる。

誠信書房

待望の新編遂に刊行

新編 感覚・知覚心理学ハンドブック

大山 正・今井省吾・和気典二編

定価51500円

人間は外部からの情報を感じ・知覚を通して得ている。そうして得た情報をもとにまた環境へと働きかけることができる。光・音・熱・においなど無数の刺激に囲まれている我々は、それらをどのように取り入れ処理しているのか。一〇一名の新執筆陣が研究の最先端を紹介する。

菊判函入・1782頁

(内容見本呈)

わたしらしさの発見4 親密さのダンス

身近な人間関係を変える
H・G・レーナー／中釜洋子訳

日常性に埋没した母親や夫との偽りの親密な関係を見直し、家族の問題と自分の役割を見直す。2781頁

〒112 東京都文京区大塚3-20-6
☎03-3946-5666 ▶税込△

3 高と比べると明瞭なことは、もしできうるならばという遠慮がちなニュアンスが消え、削除という志向が露骨に現れている点である。ここで注目したいのは、削除した3Kは生活に不可欠な労働であるということだ。それゆえ3Kを家族のからだに、外から有償で与えられるサービスと見なす視点が登場してこざるをえない。3Kを外国人労働者にまかせるという現象が、家族の問題と密接にかかわっていることがここから了解できよう。自分のからだを美学に沿って構築してゆきたいというテーマと、3K回避は家族のからだにとって、一対の欲望だということだ。

私は何を言いたいのだろうか。この3Kも、家族のからだに埋め込まれてすでに自然化している「選択的であること」の現れ、そのことの作り出す美学的表現であることは間違いない。重要なことは、若い家族のからだに宿る労働概念から、肉体労働が放逐されようとしていることである。新しい労働概念もまたサービスの受動体という観点、つまり「もてなされること」に慣れた現在の家族のからだからしか、成立しなくなりつつあるのではないか。

家族のからだは、「もてなされること」が当然なからだ、「被サービスの身体に変わってしまったということ。その度合いがどんどん強まっており、露になってきているという事態をどう了解すればいいのだろうか。サービスの主体としての家族のからだは、「もてなし」の淵のなかで、果てしもなく「軽薄短小」になっている。その先は家族のからだの溶解がはじまるのであろうか。それともつくにはじまっているのであろうか。項を改めて、この問題に接近して行こう。

2 コンビニエンスストアを手がかりに

「もてなし」という観点を導入したときの、もてなされる側にある家族のからだは、日常のなかで思いがけないくらいの変貌を被っている。そのことに否も応もなく気づかされるのは、買い物をする場面においてである。販売する側のもてなしの仕方をここでは、「人のもてなし」と「物のもてなし」の二つに大別してみよう。すると何が見えてくるか。次のように問いかけてみる。家族のからだは「人のもてなし」と「物のもてなし」のどちらを

好むのだろうか。答えはあらかじめ出ている。「物のもてなし」の方である。

東京にスーパーマーケット一号店が誕生したのは一九五三年である。同年、すでに述べたように「電化元年」という標語がヒットし、翌年その標語を受けるように、「三種の神器」（電気冷蔵庫・電気洗濯機・電気掃除機）が打ち出された。これは家族のからだの新しい利便性に対する欲求に対応していた。また新しい利便性は、これまでの人力（自分自身の労働）によるもてなしから、電化製品という物によるもてなしへの転換を意味していた。

こうした人力（人）から物への利便性という欲望の手段の転換は、同時に家族のからだに心にある重大な感性的変化をもたらしたのである。その感性的変化の象徴が、スーパーマーケットの誕生であった。スーパーマーケットの誕生とともに浮上してきたのは「物のもてなし」を快とするという感性である。顧客と店員が一对一で向かい合うのを基本形とする個人店よりも、レジに勘定機械としての人がいるだけの（したがって実質的な無人）店舗スタイルの方が好ましいという感性である。

このような都市的感性の出現は、さまざまなことを語っている。その主要な一つが、地域の解体化のはじまりである。スーパーマーケットは日常性の百貨店化である。家族の日常生活を形成する諸々のカテゴリーと対応する諸商品を一カ所に集約してある。けれど、デパートではない。デパートとの違いを考えるとすぐ分かるように、デパートは地域の個人商店と共存している。個人商店が地域の日常性の核であるなら、デパートは非日常性の部分を受け持っていた。個人商店とデパートが日常性と非日常性を相互不可侵的に棲み分けていた段階では、地域は存立していたのである。

スーパーマーケットの出現は、この両者の平和的な棲み分けに鋭い楔を打ち込む結果になったと言える。一カ所へと日常性を集約しようという効率化と利便性の新しい試みは、それまで日常生活の諸々のカテゴリーをそれぞれ個別的に請け負っていた個人商店の存在基盤を根こそぎに奪うというすさまじい変革をとまわずにはおかなかったのである。こうした事態はまた、地域の個々の家族の買い物の足がしだいに決まった地域の個人商店から遠ざかることを意味した。この点からも明らか

に地域の解体化のはじまりであった。だが、このような事態を家族が受け入れることは同時に、家族が地域から遊離・浮上すること、つまり家族の抽象的個別化のはじまりをも告げていたのである。

地域性から遊離・浮上し抽象的個別的になった家族のからだと心。このような家族の状態こそが、「人のもてなし」すなわち地域のなかに組み込まれた人と人との具象的関係をうつつとらしく思う感性の有力な土壌となったのである。

事態はさらに大きく展開して行く。東京にコンビニエンスストア一号店が出現したのは一九七四年である。チェーン店・フランチャイズシステムを採用しているコンビニエンスストアは、チェーン店なら全国どの店でも、店舗の広さは一〇〇平米くらい、品揃えは約三〇〇〇種類とこれもほぼ同じである。いつでも開いていて、すべてが歩き回らず、捜し回らず、手間のいらぬ、手の届くところに陳列されている。その意味では利便性の極限のような店舗である。

スーパーマーケットと比較したとき、コンビニエンス

ストアの特徴は、規模もはるかに小さく、商品の品揃えも少ないという点である。これは両者のかなり決定的な差異を示している。

ここでコンビニエンスストアが登場した、その当時の時代精神の生み出した風景を再度確認しておこう。一つは3Cから新3Cへの移行に現れているように、家族のからだの「もてなされること」への欲望が利便性を追求することから快適さを追求する方向へと転換したことである。もう一つはかっこいい、ナウい、ダサイなどという流行語に現れているように、若い人たちが自己の個別的な生活美学を模索しはじめたことである。

さらには出生率が二・一を割った年にも当たっている。家族のからだが自己をどこまでも縮小しようとし、そのことが社会の縮小へと結びついてゆく、そういった展望をひらいたのが、この時点なのである。だがここでは、生活のコンパクト化という方向をとりあえず、生活美学とのからみで摘出しておくだけにとどめよう。

このような時代精神のかたちとコンビニエンスストアの登場とは、見合っているというふうに考えるのが常識というものであろう。美学と結びついた快適さとは、例

えば、食べたいときに食べられないことが不快であるというようなものである。この不快さを解消するために、コンビニエンスストアの二四時間オープンの思想がある。

自分だけでなく自分以外の家族の構成員のことをも考えざるをえない主婦のような存在のからだところには、自分の中の買物地図にスーパーマーケットは載っていない。反対に自分以外の他の家族のことを心配する必要のない存在にとってコンビニエンスストアは不可欠に映っている。簡単にいえばコンビニエンスストアは若い人たちや子供たちの視野をとらえていても、大人の視野からはこぼれ落ちていく。どうやらコンビニとスーパーは相互に不可侵であり、共存しあっているらしい。ここまでは了解できそうだ。問題はだが、その先にある。このなんとも奇妙な棲み分けは、どうして成立したのだろうか。

コンビニエンスストアとスーパーマーケットの基本的な違いの一つは、後者が家族を対象にしているのに対して、前者は独りをテーマにしている点である。スーパー

マーケットの思想に対応するのが九時～五時の家族の思想であり、二四時間OKなのがコンビニエンスストアの思想であるとするれば、それは都市的感性をもった独り者の思想に対応していることになる。言い換えればスーパーマーケットは「家族」の思想をディスプレイおよび商品展開の軸に据えている。またスーパーマーケットは地域を解体したにもかかわらず、自己の店舗を中心にして地域性を形成しようとする。コンビニエンスストアの場合、「独り」の思想に加えてさらに、暗黙のうちにではあるけれど、地域性もひいては社会性をも離脱している。

店に入ってくる客がどこに住み、どんな家族がいて、何を仕事にしているのか、などといった帰属性を問わないのである。脱家族、脱地域がコンビニエンスストアの思想である。(コンビニエンスストアが関心を寄せるのはその店でどんな年齢、どんな性別の人が、何時ころ、何をどのくらい買って行ったかという情報だけである)。抽象的であり、ゲリラ的であり、風景を形成せず、風景から浮いている。地元に対立的な反地域的な存在ではないが、かといって地域志向的でもない。脱地域、脱社会

的存在なのだ。これは七〇年代の時代精神が浮上させた私たちにとってまったく馴染みのなかった新しい光景であると言える。

この脱家族的、脱地域的光景に若い家族のからだは、誘蛾灯に誘われるようにして、近づいて行く。コンビニエンスストアはその家族の内側が個人化しはじめたことを伝えようとしている。家族から個人が遊離・浮上しはじめたのだ。コンビニエンスストアは、家族という観念と、その観念の元に結びついている家族の一人一人の構成員の隙間に楔を打ち込んだのである。

その結果、「物のもてなし」を好む感性は、一段と加速されることとなった。家族内にも浸透し、それがいまの私たちの家族と家族関係を不思議な孤立感に追い込んでいる。また人間関係への淡いけれどしぶとい飢餓感が家族をとらえて離さないのは、ここに主な理由があるようにもおわれるのである。

家族に関する文献五〇冊

■調査・資料のなかの家族

読売新聞社婦人部編『日本人の人生案内』（平凡社）

家庭総合研究会編『昭和家庭史年表』（河出書房新社）

経済企画庁編『国民生活白書』

経済企画庁国民生活局編『国民生活選好度調査』

厚生省人口問題研究所監修『日本人の結婚と出産』（第九次出

産力調査 一九八七年）

同『独身青年の結婚観と出産』

■教養としての家族

福田アジオ・塚本学編『家・親族の生活文化』（吉川弘文館）

石川栄吉・峰岸純夫・三木妙子編『家と女性』（三省堂）

布施晶子・玉水俊哲・庄司洋子『現代家族のルネサンス』（青

木書店）

原ひろ子・阿部謹也他『家族』（藤原書店）

上野千鶴子・山田太一他編『講座変貌する家族』（岩波書店）

有地享・老川寛編『離婚の比較社会史』（三省堂）

E・ベックⅡゲルンスハイム『出生率はなぜ下がったか』（勁

草書房）

南博編『近代庶民生活誌「赤線」』（三一書房）

■家族の思想論

J・ドンズロ『家族に介入する社会』（新曜社）

米沢慧『事件としての住居』（大和書房）

横川寿美子『初潮という切札』（宝島社）

伊藤比呂美『家族アート』（岩波書店）

■胎児・誕生

吉本隆明『ハイ・エディッパス論』（言叢社）

三木成夫『胎児の世界』（中央公論社）

D・チェンバレン『誕生を記憶する子どもたち』（春秋社）

春秋社編集部編『誕生の記憶』（春秋社）

B・ドゥーデン『胎児へのまなざし』（阿吽社）

W・V・ラフラー・エンゲル『胎児は学ぶ』（大修館書店）

■若者

中島梓『コミュニケーション不全症候群』（筑摩書房）

町沢静夫『成熟できない若者たち』（講談社）

成沢大輔『古橋健二ほか『おたくの本』（宝島社）

■子供問題

S・セッションス他『少女セリーの告発』（徳間書店）

B・カーフェマン他『強姦する父』（未来社）

E・バス編『誰にも言えなかった』（築地書館）

月刊『子どものしあわせ』編『子育てんないや!』（草土文化）

崎尾英子『かよいあいたい心たち』（言叢社）

J・ブラッドショー『インナーチャイルド』（日本放送出版協

会）

飯島吉晴『子供の民俗学』（新曜社）

遠丸立『犯罪の中の子ども』（現代書館）

東京シュレ父母会編『父親が語る登校拒否』（現代企画室）

石川憲彦・内田良子・山下英三郎編『子どもたちが語る登校拒否』（世織書房）

芹沢俊介『現代〈子ども〉暴力論』（大和書房）

芹沢俊介編『少年犯罪論』（青弓社）

下村哲夫『児童の権利条約』（時事通信社）

■からだ

松井洋子『人と人との「あいだ」』（太田次郎社）

J・オニール『語りあう身体』（紀伊国屋書店）

■死

葬送の自由をすすめる会編『墓からの自由』（社会評論社）

D・ハンフリー『ファイナル・エグジット』（徳間書店）

山折哲雄『臨死の思想』（人文書院）

森岡正博『脳死の人』（東京書籍）

■性

桑迫昭夫・朝倉喬司『凝視録』（現代書館）

M・フリー『性の歴史』（新潮社）

芹沢俊介（せりざわ・しゅんすけ）
一九四三年生。上智大学経済学部卒。

現在 文芸評論家

主要著書 『漂流へ——芹沢俊介家族論集』（春秋社）

『現代〈子ども〉暴力論』（大和書房）

『他界と遊ぶ子供たち』（青弓社）
『ビジネス書、時代の欲望』（時事通信社）

『脳を探検する』ブックフェア

人文会の会員社が中心となって、

「脳を探検する」と銘うって、脳の本を集めたブックフェアを2月より全国の大書店で開催した。現在、最前線の科学の進歩によって、人間の未知の部分であった脳の解明は進んでおり、一般の人々への脳の関心は高まっている。この時期にNHKでは「驚異の小宇宙、人体Ⅱ 脳と心」を放映中で、このフェアはこうした機運の高まりを受けて、人文会の十社に有力出版社四社の参加によ

り、各出版社の選りすぐった書籍Aセット＝四十点二百冊、Bセット＝四十五点四十五冊を揃えた。

このフェアは店頭用に養老孟司先生の巻頭言の入ったパンフレットを各店二百枚、POP、ポスターなど配付、また読者プレゼントとして、NHKスペシャル「脳と心」サウンドトラックCD（三十人）テレフオンカード（五十人）養老孟司先生の講演会無料招待（五十人）などこの読者が関心ありそうなものを用意した。このフェアは取次店からも熱意あるご支援を得て、全国の有力書店からの反響は大きく、たちまち一三

六店の申込みをいただき、予定したセットは満数に達することができた。

実施された参加店からは予想以上に実績がいいので、期間を延長するとのうれしい朗報が続々と届いている。

参加出版社、人文会会員社 青木書店、大月書店、紀伊國屋書店、春秋社、晶文社、誠信書房、草思社、筑摩書房、東京大学出版会、法政大学出版局、ミネルヴァ書房。
一般出版社 朝日新聞社、青土社、日本放送出版協会、法蔵館
(章思社 小林 登美夫)

『脳を探検する』ブックフェア*書名目録

坂野 登 『脳のはたらきと子どもの教育』(青木書店)
坂野 登 『かくれた左利きと右脳』(青木書店)
坂野 登 『無意識の脳心理学』(青木書店)

梅原 猛編 『「脳死」と臓器移植』(朝日新聞社)
河合隼雄 『中年クライシス』(朝日新聞社)
高木貞敬 『朝日選書307 子育ての大脳生理学』(朝日新聞社)

- 小出五郎『朝日選書351 脳140グラムの宇宙』（朝日新聞社）
 汐見稔幸『このままでいいのか超早期教育』（大月書店）
 松本淳治『「寝る子は育つ」を科学する』（大月書店）
 塚原仲晃『脳の可塑性と記憶』（紀伊國屋書店）
 朝長正徳『脳の老化とぼけ』（紀伊國屋書店）
 水野 肇『脳死と臓器移植』（紀伊國屋書店）
 信濃毎日新聞社編『脳 小宇宙への旅』（紀伊國屋書店）
 伊藤正男『脳と心を考える』（紀伊國屋書店）
 D・チェンバレン『誕生を記憶する子どもたち』（春秋社）
 春秋社編集部編『誕生の記憶』（春秋社）
 R・オーンスタイン他『脳ってすごい！ 絵で見る脳の科学』（草思社）
 D・A・トレットファート『なぜかれらは天才的能力を示すのか サヴァン症候群の驚異』（草思社）
 D&C・マウラ『赤ちゃんには世界がどう見えるか』（草思社）
 D・スターン『もし、赤ちゃんが日記を書いたら』（草思社）
 O・サックス『妻を帽子とまがえた男』（晶文社）
 O・サックス『レナードの朝』（晶文社）
 S・シャラー『言葉のない世界に生きた男』（晶文社）
 A・バッドリー『記憶力 そのしくみとはたらき』（誠信書房）

- 北米神経科学協会編『脳のしくみと健康』（誠信書房）
 堀 忠雄他編『脳と心のトピックス100』（誠信書房）
 R・スペリー『融合する心と脳 科学と価値観の優先順位』（誠信書房）
 多田富雄『免疫の意味論』（青土社）
 養老孟司『唯脳論』（青土社）
 養老孟司『解剖学教室へようこそ』（筑摩書房）
 養老孟司『からだの見方』（筑摩書房）
 養老孟司『ヒトの見方』（筑摩書房）
 平野龍一他『脳と心』（東京大学出版会）
 J・C・エックルス『脳の進化』（東京大学出版会）
 山鳥 重『NHKブックス482 脳からみた心』（NHK出版）
 NHK取材班『NHK驚異の小宇宙 人体Ⅱ 脳と心①』（NHK出版）
 NHK取材班『NHK驚異の小宇宙 人体Ⅱ 脳と心②』（NHK出版）
 W・ベンフィールド『脳と心の正体』（法政大学出版局）
 養老孟司『カミとヒトの解剖学』（法蔵館）
 M・S・ガザニガ『二つの脳と一つの心』（ミネルヴァ書房）

一九九三年 人文会各社の受賞図書一覧（アイウエオ順）

- ・アジア・太平洋賞
 鐔木昌之著「北朝鮮」（東京大学出版会）
- ・梓会出版文化賞
 「ものゝ人間の文化史」「叢書・ユニベルシタス」（法政大学出版局）
- ・伊藤整文学賞
 上西晴治著「十勝平野」（上下）（筑摩書房）
- ・愛媛出版文化賞
 藤本鐵雄著「明治期」の別子そして住友」（御茶の水書房）
- ・大平正芳記念賞
 中兼和津次著「中国経済論」（東京大学出版会）
- ・菊池寛賞
 秦郁彦著「戦前期日本官僚制の制度・組織・人事」他（東京大学出版会）
- ・キリスト教史学会学術奨励賞
 小檜山ルイ著「アメリカ婦人宣教師」（東京大学出版会）
- ・講談社エッセイ賞
 林望著「林望のイギリス觀察辞典」（平凡社）
- ・交通図書賞
 児玉幸多編「日本交通史」（吉川弘文館）
- ・サントリー学芸賞
 赤根谷達雄著「日本のガット加入問題」（東京大学出版会）
- ・岩井克人著「貨幣論」（筑摩書房）
- ・岡崎哲三著「日本の工業化と鉄鋼産業」（東京大学出版会）
- 木下直之著「美術という見世物」（平凡社）
- ・杉田英明著「事物の声 絵画の詩」（平凡社）
- ・高山博著「中世地中海世界とシチリア王国」（東京大学出版会）
- ・渋谷・クロードル賞
 栗田啓子著「エンジンニア・エコノミスト」（東京大学出版会）
- ・月村辰雄著「恋の文学誌」（筑摩書房）
- ・女性史青山なを賞
 小檜山ルイ著「アメリカ婦人宣教師」（東京大学出版会）
- ・造本装幀コンクール
 国立史料館編「江戸時代の紙幣」（東京大学出版会）
- ・林達夫・久野収著「思想のドラマトゥルギー」（平凡社）
- ・東京海上各務記念財団優秀著書賞
 中西徹著「スラムの経済学」（東京大学出版会）
- ・中村元賞
 前川輝久著「マックス・ヴェーバーとインド」（未来社）
- ・中山MAS基金賞
 古川久敬著「構造こわし」（誠信書房）
- ・日刊工業新聞技術・科学図書文化賞
 神沼二真著「ハイテクと日本の未来」（紀伊国屋書店）
- ・日経・経済図書文化賞
 栗田啓子著「エンジンニア・エコノミスト」（東京大学出版会）
- ・森川英正「ZAIBATSU」（東京大学出版会）
- ・日仏翻訳文学賞
 阿部良雄訳「ボードレール全集」（筑摩書房）
- ・日本教育行政学会奨励研究賞

大田直子著「イギリス教育行政制度成立史」(東京大学出版会)

・日本生活学会(今和次郎)賞

早川和男・岡本祥浩著「居住福祉の論理」(東京大学出版会)

・日本農業経済学会学術賞

八木宏典著「カリフォルニアの米産業」(東京大学出版会)

・日本翻訳出版文化賞

エブレオ著・本田誠二訳「愛の対話」(平凡社)

クレイノヴィッチ著・柘本哲訳「サハリン・アムール民族誌」(法政

大学出版局)

スタンダール著・山辺雅彦訳「ロッシニ伝」(みすず書房)

セール著・豊田彰訳「青春ジュール・ベルヌ論」(法政大学出版局)

トーマス著・荒木正純訳「宗教と魔術の衰退」(法政大学出版局)

ニードム著・井上英明訳「理解の類型」(法政大学出版局)

・NIRA政策研究・東畑記念賞

八木宏典著「カリフォルニアの米産業」(東京大学出版会)

・福武直賞

高橋明善編著「農村社会の変貌と農民意識」(東京大学出版会)

・森嘉兵衛賞

洞口治夫著「日本企業の海外直接投資」(東京大学出版会)

・柳田国男賞

高松敬吉著「巫俗と他界観の民族学的研究」(法政大学出版局)

・雄山閣考古学特別賞

日本第四紀学会・小野昭・春成秀爾・小田静夫編「図解・日本の人

類遺跡」(東京大学出版会)

・吉田茂賞

酒井哲也著「大正デモクラシー体制の崩壊」(東京大学出版会)

・読売文学賞

富岡多恵子著「中勤助の恋」(創元社)

中園英助著「北京飯店旧館にて」(筑摩書房)

・和辻哲郎文化賞

加藤尚武著「哲学の使命」(未来社)

土居良三著「威臨丸海を渡る」(未来社)

「知の再発見」双書

既刊35点

絵で読む世界文化史!

C・エリュエール著 鶴岡真弓監修

ケルト人

英雄戦士・黄金装身具・ドウルイドなど、神話に満ちた民族の興亡と驚異の文化。 1400円(税込)

V・ドンデ著 荒俣 宏監修

人魚伝説

ホメロスからアイズニールまで、海の妖精ができるまでのイメージの歴史と博物誌。 1300円(税込)

創元社

〒530 大阪市北区西天満1・4・2
〒162 東京都新宿区山吹町334・11
☎06-363-2531 ☎03-3269-1051

『人文書のすすめ』利用の仕方

誠信書房 濱地 正憲

本書『人文書のすすめ』は、人文書を主に刊行している出版社の集まり23社で構成する人文会の創立25周年を記念して刊行したものです。前回の20周年記念『人文科学の現在』の出版から、早いもので5年が経過し、その間、人文書はどのように変化したのでしょうか。人文書は根強い読者に支持されながらも、売れ行き面から見ますと苦戦を強いられていると思われる。そこで読者・図書館と書店の皆さんとの橋渡しができ、人文書の売れ行きの活性化ができればと願いつつの刊行となりました。

本書は2部構成になっています。第1部は人文科学を専攻される大学の著名な先生方を中心に小論文とそれに関連する文献を掲載しており、

20名が執筆されています。掲載した小論文は「人にはどれだけの知識がいるか」加藤尚武、「近代思想との格闘」浜田義文、「自己発見の心理学」大村政男、「宗教にとまどう若者文化」大村英昭、「今、なぜ歴史学か」姫田光義、「都市論の現在」陣内秀信など思想・心理・宗教・歴史・社会と多岐にわたっています。例えば、自分というものをと知りたいたいと考える読者は大村政男先生の小論文を読み、そして参考文献に性格を知る、自己発見のためのセオリー、自己を知るためのセラピーテクニック、自己発見のためのガイドブックと丁寧に分類された参考図書を読むことで新たな自己発見の旅ができるのではないのでしょうか。

第2部は、人文会特約書店様のご

協力を得て、今後3年から5年間は売れ行き良好と思われる、かつ人文書の棚を形成する上で核となるものという基準で哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会、教育、批評・評論の7分野51分類にした基本図書リスト3100点を掲載しています。

現代は情報過多、氾濫の時代といわれています。第1部の論文で加藤尚武先生は「無限の情報を有限化する必要がある」「目的に応じて自由に変化する情報を持つべき」と言われています。第2部で『批評・評論』の新分野を設けたのも同じ考え方で、並べ方を変えることで新しい島が出現したのではないのでしょうか。とはいながらも、現在流通している人文書といわれるものは約3万点から4万点はあると思います。それ

こそ、1点1点がそれぞれの考え方や出版意義に基づいて刊行されたものだと考えますと、その中から基本図書といふべき書籍を選定することは非常に困難が生じましたが、現時点のロングセラーという割り切り方で決定していった次第です。

また、分類にしましても図書館さんがされている日本十進分類法に基づいておりません。したがっていまして検索するには不便かと思いますが少しでも検索しやすいようにと今回からISBNコードを付しました。

私事になりますが、本書の編集に

は25周年記念編集委員会のメンバー6名が携わり、約10数回の編集会議を行いました。何回目かの会議の時から長時間にわたり、その間に台風が段々激しくなり、会議が終わる頃には御茶の水駅の線路下は陥没するし、地下鉄は冠水するという状態でメンバーはやっとの思いで帰宅したこともありました。そんな中での刊行となりました。

本書を刊行後、書店さんでは、読者に供しようと基本図書の全点を在庫チェックして、棚に揃えられたり、また一般読者の方や図書館さん

から多数のご注文をいただきましたが、さらに喜ばしいことでは図書館情報大学から採用テキストとしてご注文をいただいたことです。授業でどのように使われるかは知る由もありませんが、図書館人を育成する大学で採用されることは出版者冥利に尽きると思います。

本書を様々な形でお読みいただき、ご利用をいただきたいものと願っております。

『本を選ぶ』（ライブラリー・アド・サービス）No.106より転載

人文会創立二五周年記念出版

人文書のすすめ

——人文科学の動向と基本図書——

今、話題の人文科学におけるテーマ、人の知識、自己発見、認知科学、宗教と若者、中世史、フェミニズム、戦争と平和、都市論、学校と教育などについて、第一線で活躍する20名が執筆する。さらに分野別基本図書二〇〇点を収載。A5判 四三頁 二八〇〇円(税込)

発行 人文会

取扱い

誠信書房内

東京都文京区大塚3-20-6
電話03-3946-5666 〒112

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1994. 4. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
幹 事	青 木 書 店	古川 清	162	新宿区早稲田鶴巻町 538	3202-3999	3204-1187
幹 事	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	尼子 英二	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社会思想社	清水 博	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	3813-8105	3813-9061
	春 秋 社	鈴木龍太郎	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
	草 思 社	小林登美夫	150	渋谷区神宮前 4-26-26	3470-6565	3470-2640
代表幹事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	吉田 信夫	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	3987-8621	3987-8590
	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
	平 凡 社	丸山 正美	102	千代田区三番町 5 Kビル	3265-0455	3263-9333
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	162	新宿区市谷田町 2-14-1	5228-6271	5228-6010
幹 事	み す ず 書 房	福田 晴行	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1		
				(075) 581-5191 (075) 581-0589		
			162	新宿区市ヶ谷山伏町 5	3267-3849	3235-9539
	未 來 社	西谷 雅英	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有 斐 閣	高橋 睦美	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
幹 事	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544
販売企画委員会 ◎福田 ○清水 丸山 鈴木 高橋 杉田						
弘 報 委 員 会 ◎原田 ○西谷 小林 吉田						
調査・研修委員会 ◎阿部 ○氏家 菅田 平石 土屋						
図 書 館 委 員 会 ◎市川 ○尼子 重光 濱地 萬洲						

東京都文京区本郷7-2・電03-3813-9151

現代市民社会と企業国家

平田清明 山田鋭夫 加藤哲郎 黒沢惟昭 伊藤正純著
企業主義的 社会国家Ⅱ日本はいかなる問題を、内包して
いるのか。世界における日本国家、企業主義の構造、過
労死の実態などから接近分析。
定価2575円

評論集クリティカルに

水田 洋著
「クリティカル」とは批判のない文章が評論の名のもと
に横行している社会状況へのプロテストと断ずる思想史
研究者による「世界」「旅」「本」を中心に収録した最
新鮮論集。
定価2678円

御茶の水書房

東京・文京区本郷5-30-20 ☎5684-0751

小谷真理

女性状無意識 女性SF論序説

新世代のフェミニストが著す待望
の女性論&文化論。 2987円 380

富島美子

女がうつる ヒステリー仕
掛けの文学論
表象や知のシステム自体の「ヒス
テリー」をあばく。 3090円 380

大野盛雄・小島麗逸 編著

アジア 厠考

現地体験から、アジアを知るもう
ひとつの視点を提供。 2884円 310

薦森 樹

男でもなく女でもなく
女性性にひかれるなら実践せよ/
女装哲学を説く。 2副/2678円 310

* 定価は税込/振替東京5-175253

東京文京 後楽2-23 勁草書房 電話(03)
3814-6861

社会思想社

史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ
戦争と放送 竹山昭子

焼却処分をまねがれた史料の一字一句を掘り起
こし情報操作の実態を検証 四六・二二〇〇円

ナポレオン・ボナパルト 山上正太郎
〈自由・平等・友愛のゆくへ〉 一八〇〇円

占い師! ココロの時代の光と影
躍木まさひろ マスコミで大評判・二八〇〇円

東京都文京区本郷3-25-13 〒113
電話03-3813-8101 振替東京6-71812

ラカンのところで 過ごした季節

P・レー・小笠原晋也訳

ひとりの作家がジャック・ラカンとの
10年にわたる分析経験を物語る。臨床
実践に関する貴重な証言▼2400円

「小説のように」読める、
最良のラカン入門書。

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
☎03(3439)0128(営業) 表示価格は税込み

紙でできたタイムマシン

幕末

写真の時代

小沢健志[編]

挑むようなまなざしの肖像、宿場町のにぎわい、軒を並べる露店、衝撃的な事件の現場…。日本が最も活気に満ちた時代・幕末を再現する貴重な写真300点。朝日新聞書評で反響。関連書と並べて「幕末」コーナーを/A4変型判 312頁 税込定価9800円

筑摩書房 〒111 東京都台東区2-6-4
☎048(651)0053

庭園に死す

■野田正彰 庭園を見つめることによって浄土が見えてくる。東西の名園を訪ね、「造景」する精神を比較文化論の目で捉えた、フォト・エッセイ。 3914円

木のこころのこころ 〈新装版〉

■西岡常一／松久朋琳 宮大工棟梁と昭和の大仏師が、木の技の中に日本文化の精髓を語り合う。 1751円

▶定価は消費税込み

東京外神田 2-18-6 春秋社 電話(03) 3255-9611



草思社

僕は八路軍の 少年兵だった

山口盈文

中国人兵士の中に一人身を置き解放戦を戦った日本人の波瀾万丈の記録 定価1800円

イギリスのある

女中の生涯

シルヴァマリア
徳岡孝夫訳

女中奉公に出て懸命に働いたある少女の半生記。庶民の生活を克明に綴る。定価1800円

色川大吉著

北村透谷

四六判・二四七二円(税込)

「明治」という時代と民衆意識との間にあって苦悶しつづけた思想家、北村透谷。本書は、その出発点を透谷研究におく歴史家が一気に書き下ろした渾身の透谷論である。

小林康夫・船曳建夫編

知の技法

A5判・一五四五円(税込)

東京大学教養学部「基礎演習」テキスト
カリキュラム改革が進む東京大学教養学部で、一九九三年度から文系一年生の必修科目として開設されたゼミ形式の「基礎演習」のテキスト。

東京大学出版会

東京都文京区本郷7 TEL 03-3811-8814

〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26 電話03(3470)6565

これからの世界史

全13巻書下ろし●定価各2800円(税込)

5月下旬刊

好評発売中

- 1 近代世界を割ぐ
廣松 渉 西欧近代の特異性を歴史的に検証。
- 5 ラーム神話と牝牛 ヒンドウイ
イスラム
小谷 注之 宗教抗争に揺れるインドの未来は？
- 12 近代の今日的位相
田口富久治 ギデンス理論に立ち 現在を計測。
- 8 神々の力と非力
森安達也 近代にとってキリスト教とは？

平凡社 〒102 東京都千代田区三番町 5
振替・東京8-28839 ☎03-3265-0455



日本評論社

※表示価格は税込み

- 高齡化時代を豊かに生きるための必読書。
医療と福祉の新時代
岡本祐三／著 「寝たきり老人」はゼロにできる
- これからの在宅ケアはいかにあるべきかを提起する。
高齡社会と在宅福祉
針生誠吉・小林良二／編 都市研究叢書⑩
- わかりやすく、まとめられた「不登校児対策マニュアル」。
不登校児とのつきあい方
稲垣 卓／著 —— 学校教師のために

1854円 3300円 2000円

東京都豊島区南大塚3-10-10 TEL.03-3987-8621販売

法政大学出版局

(表示価格は税込)

好評重版

- ミラー／池田栄一訳……………三七〇八円
ヨーロツパ人とアメリカ人
デュル／藤代幸一・津山拓也訳……………五九七四円
秘めごとの文化史
デュル／藤代幸一・三谷尚子訳……………四四一九円
裸体とはじらいの文化史
ハリスン／小林祐子訳……………二九八七円
台所の文化史
ハリスン／工藤政司訳……………二〇六〇円
買いい物の社会史

〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1
☎03-5228-6271 振替・東京6-95814



—最新刊—

- 久世敏雄編 A5判／定価七〇〇〇円
現代青年の
心理と病理 社会的相互作用の
中での青年の発達
の諸相およびその
病理構造を探索。
- 片岡徳雄編 A5判／定価八〇〇〇円
文芸の教育社会学
文学や芸術が人間形成に果たす役割
を多様な素材から社会学的に解明。

東京・文京 福村出版 電話 (03)
小石川1-3 *定価は税込* 3813-3981

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印